

「離在」(χωριστόν) : abegescheidenheit

高橋 克己

TAKAHASHI, Katsumi

(人間基礎論コース)

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

Πλάτων(Platon)と Αριστοτέλης(Aristoteles)の一方を称揚する二者択一も伝統として有るが、他方これを良しとせず、「プラトーンとアリストテレスの^{コンコルディア} concordia (協和・一致)」を演説『人間の尊厳について (De Hominis Dignitate)』(1486年)で説いた^{ルネサンス} 文芸復興期のイタリア人^{ピーコ} Picoも居る。普通は^{シנקレティスムス} Syncretismus (折衷主義 : Συγκρητισμός) と呼ばれる彼の主張はこうである。「私達が第一に提示したのは、プラトーンとアリストテレスの協和・一致で、これは多数により今迄信じられつつも、誰によっても十分証明されなかったことである。」【Proposui primò Platonis Aristotelisque ^{コンコルディア} concordiam a multis antehac creditam, a nemine satis probatam.】(Giovanni Pico della Mirandola: »De Hominis Dignitate«, »Heptaplus«, »De Ente et Uno«, et »Scritti Vari« a cura di Eugenio Garin. Firenze. Vallecchi 1942. p.144)。当の^{コンコルディア} concordia (協和・一致)が、^{ア-マルチエ-アンテハク} a multis antehac ^{クレディタ} credita (多数により今迄信じられ)と記されているが、同様の「多数により今迄信じられ」と言う事は二者択一の^{シנקレティスムス} アリストテレス主義やプラトーン主義にも妥当する事であろう。とにかく自分自身の諸説混合を目指す^{シנקレティスムス} 成果を、続けてピーコはこう述べる。「第二に、プラトーン哲学とアリストテレス哲学の両方において、私達自身で考え出したことを、更に 72 の新たな自然学と形而上学の教義として纏め上げた。」【Secundo loco, quae in philosophia cum Aristotelica tum Platonica excogitavimus nos, tum duo et septuaginta nova dogmata physica et metaphysica collocavimus,】(p.146)。この点^{ピーコ} ピーコ同様エックハルトも、「プラトーンとアリストテレスの協和・一致」を支持すると思われるが、前者が「72 の新たな教義」を案出し一般化しているのに対し、後者はこの際^{コリストン} 「離在」(χωριστόν : abegescheidenheit : Werke I. 1107 Seiten / Werke II. 1026 Seiten. Bibliothek deutscher Klassiker 91/92. Bibliothek des Mittelalters. Bd.20/Bd.21. Frankfurt am Main. Deutscher Klassiker Verlag. 1993. Werke II. S.434 : 論述『離在について : Von abegescheidenheit』)の一事に焦点を定めている、と考えられる。

その前に一旦^{ピーコ} ピーコの時代 15 世紀に留まり、彼と異なり二者択一を迫る立場をも瞥見しておく。両者の対立は、トルコ軍下 1453 年に陥落する^{ローマ} 東 Roma 帝国領だった斜陽の東方ギリシア教会圏から碩学が多数イタリア訪問した^{コンキリウム オエクメニクム} Concilium oecumenicum (東西キリスト教会合同公会議)の場、^{フェラーラ} Ferrara (1438年)と^{フィレンツェ} Firenze (1439年)で顕著となる。当時 1438年、東ローマ帝国の政治権力が後 394年、前 776年より千年以上続いた^{オリュムピア} Ολύμπια(Olympia)競技を禁止した後、創設後 900年以上存続していたプラトーンの^{アカデμία} Ακαδημία 学園(前 397年-後 529年)を強制閉鎖してから約 900年後、イタリア文芸復興の時代 1438年、当時勃興し躍進中の都市国家^{アカデμία} フィレンツェで^{アカデμία} Accademia ^{プラトーンニカ} Platònicaが再建される。この時^{フィレンツェ} フィレンツェ共和国が歓迎した^{プラトーン} プラトーン学派 Πλήθων(Plethon)、「彼が解き明かしたプラトーン哲学、それはイタリア人達の耳には toute neuve encore (依然として全く新鮮)であった。」(Patrologiae cursus completus. Paris. Migne 1844-1866. Patrologia Graeca [=PG] 1857-66/Patrologia Latina [=PL]. 1844-64. PG. Tom.160. 1866. Col.799-800)と、

プレートーンに関する『フランス語で認められた既知事実その2 (Notitia altera Gallice adornata)』(PG. Tom.160. Col. 793-806) に記されている事に誇張はないであろう。そして「結局その時多数の要望で、恐らくCòsimo Mèdici自身の要望で、彼は小論『アリストテレスの学説とプラトーンの学説との差異』(Différences entre les doctrines d'Aristote et celles de Platon) を物した。当時これが両学派間の論争の最初の口火であった」(PG. Tom.160. Col.799-800)。『プラトーン哲学とアリストテレス哲学の差異について (De Platonicae et Aristotelicae Philosophiae Differentia)』(PG. Tom.160. Col.889-890) と羅訳された当著『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする事柄について : Περί ὧν Ἀριστοτέλης πρὸς Πλάτωνα διαφέρεται』(1439年) に関しては、Johannes Hirschbergerが『哲学史 : Geschichte der Philosophie』(Bd.1. 1948. 12. Aufl. / Bd.2. 1952. 11.Aufl. Freiburg i.B. Herder 1980) 第2巻でこう説明している。「プレートーンは全く古典古代に没頭し、プラトーン主義の指導下でのギリシア宗教復興を夢見た。アリストテレスが(彼に)拒否された理由は、Welt(世界)の永遠を説き、魂の個人人格上での不滅、及び神のVorseeung(摂理 : πρόνοια)を否認しているからで、反対にプラトーンはjenseitig(彼方 : ἐπέκεινα : supra)の世界、および何よりもSchöpfergott(創造神 : 善[美]の神 δημιουργός ἀγαθός [«Τίμιος» 29A] Demiurgos agathos)を識るとの旨である。この『アリストテレスとプラトーンの哲学の差異』について、プレートーンは自分の著作を物した。」(11.Aufl. Bd.2. S.11)。

プレートーンが当著作で重視している中で、「世界の永遠」と「魂の個人人格上での不滅」と「神の摂理」に関しては、双方のうち専ら一方だけに固有な特長とすることは恐らく困難と考えられるが、しかし「ἐπέκεινα(彼方 : supra : trans)の世界」、即ち現世から離在(χωριστόν)で超越した理念(ιδέα)界と、世界の δημιουργός(造物主)の二点は、プラトーン哲学の中心に据えられて然るべきであろう。そして東西を問わず全体キリスト教思想圏にとっても、この二点こそ実に興味深いプラトーン哲学の双壁と考えられる。後者は『Τίμιος : Timaios』において、「このπάν(万有)のποιητής(創出者)にして父」【ποιητής καὶ πατήρ τοῦδε τοῦ παντός】(Platons Werke. 底本«Euvres complètes: Collection Budé 1955-1974». Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1971-1981. 28C : Tom.10. p.141: Bd.7. S.34) であり、「もし実際、一方でこのκόσμος(世界)が美しく、他方 δημιουργός(造物主)が善なら、明らかに不滅のものに造物主は眼指を向けた。」(29A : Tom.10. p.141: Bd.7. S.34) 【[...] Εἰ μὲν δὴ καλὸς ἐστὶν ὁδε ὁ κόσμος ὃ τε δημιουργὸς ἀγαθός, δῆλον ὡς πρὸς τὸ αἰδίων ἐβλεπεν [...]】と、τὸ αἰδίων(不滅のもの)たるιδέα(理念 : εἶδος形相)に言及され、この「ἔργα(諸作品)の父、 δημιουργός(造物主)」(41A : Tom.10. p.156: Bd.7. S.64) 【 δημιουργός πατήρ τε ἔργων,】こそ、νοῦς(叡智)界たるιδέα(理念 : εἶδος形相)界の重鎮、即ちνοῦς(叡智)の中のΝοῦς(叡智)に他ならない。そして新プラトーン学派がプラトーンの対話篇『Parménides : Parmenides』の全⑧仮定のうち格別重視した仮定①【137C-142A : Bd.5. S.232-245; Tom.8. Part.1. p.72-78】と仮定②【137C-155E : S.232-287; p.79-99】のτὸ ἓν(一者 : das Eine)と同一視した「善(ἀγαθόν)の理念(ιδέα)」(『国家』6//7 : 505A/508E//517B)が、νοῦς(叡智)たる δημιουργός(世界の造物主)をも含む「οὐσία(真実在・本質・実体 : 存在όν)の ἐπέκεινα(彼方)」【ἐπέκεινα τῆς οὐσίας】(509B: p.139: S.544) に遠望され、言わば δημιουργός(造物主)の δημιουργός(造物主)、純粹造物主そのもの自体と看做され、χωριστόν(離在)の ἐπέκεινα(彼方)と δημιουργός(造物主)が織り合わされる。この双方が相互浸透した「[始源の]第一の神」にプレートーンは『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする事柄について』第1章の冒頭で言及している。「さて第一に、一方プレートーンが、万物の王者(『Επιστολαί : 書簡』2 : 312E)たるθεός(神)を、νοητή(叡智的)で如何なる場合もχωριστή(超越・離在)のοὐσία(真実在 : 存在όν)の[根源たる] δημιουργός(造物主)、このοὐσία(真実在)に起因する現世の全[世界・宇宙に相当する] οὐρανός(天界)の造物主(上

記『Timaios』29A)として据えているのに対し、他方アリストテレスは神を δημιουργός(造物主)と唯の一度たりとも言っておらず(『形而上学』第12書 1074A37: τὸ πρῶτον κινοῦν ἀκίνητον: 第一の不動の動者/1074-B34: νοήσεως νόησις: 思惟の思惟/『ニコマコス倫理学』1177A: 究極の幸福… 観想的 θεωρητική [現実態])、その代わり現世の οὐρανός(天界)が運動すると説いているだけである(下記『天体論』283B)。「【Πρῶτον μὲν οὖν τὸν πάντων βασιλέα θεὸν Πλάτων δημιουργὸν τῆς νοητῆς τε καὶ χωριστῆς πάντη οὐσίας, καὶ δι' αὐτῆς τοῦ παντός τοῦδε οὐρανοῦ τίθεται Ἀριστοτέλης δὲ δημιουργὸν μὲν οὐδενὸς οὐδαμοῦ αὐτὸν φησιν εἶναι, ἀλλὰ μόνον τοῦ οὐρανοῦ τοῦδε κινητικόν】(Byzantion. Revue internationale des études byzantines. 43. 1973. 321頁24-27: PG. Tom.160. Col.889C)。絵画『アテーナイの学院: la Scuola di Atène』(1509年-1510年)の中で、創世論『ティマイオス』を左手で垂直に持ち、右手で彼方・上方の理念界を示すプラトーンと、『Nikomachos倫理学: Ἠθικά Νικομάχεια』を左手で水平に持ち、右手で足下の大地を指すアリストテレスを並べて描いたRaffaello同様、プラトーンも「睿智的で離在の真実在」と「現世の全天候」に分極化して、両者の相違を際立たせる所に力点を置いている。

プラトーンに対抗して、早速1455年アリストテレス学派 Τραπεζούντιος (Trapezuntios)が反駁の書を提示する。その題名は『プラトーンとアリストテレスの比較』(1455年)、この比較でアリストテレスが、プラトーンより多くの点で一層優れて(PG. Tom.161. Migne 1866. Col.756/Col.757)いとcontendit(彼は強硬に主張した)。…しかし反プラトーンのconvicia(非難)とmaledicentia(誹謗)で書が一杯なので、そこで当書をΒησσαρίων(Bessarion)がperlegit(吟味し)、著者のtemeritas(無思慮)にpermotus(攪乱され)、著者のmens(精神)をexsecratus(呪い)、(1469年)トラペズーンティオスの名は出さずに、『プラトーンのcalumniator(曲解者)に抗する』四書で応えた。まずプラトーンの知恵と教義を、次にプラトーン著作集と私達の聖書との類似を、かつ美風良俗と清廉潔白な生涯を彼は説明している。更に著者のinscitia(無知)をより一層表明するため彼は第五書を追加し、この中でプラトーンの『法律: Νόμοι』に関し著者トラペズーンティオス自身の解釈におけるerrores(諸過誤)やlapsus(諸失錯)を彼は拾い上げ、反駁し、正した。(トラペズーンティオス- 既知事実Notitia)。時代の潮流は当15世紀から翌16世紀にかけてプラトーン学派に有利に働く。その思想の息吹は殊にBotticelliの絵画『Primavera: 春』(1482年頃)から良く伝わって来る。この霊気の源は主に、上記Accademia Platonicaにおいて1462年以降その中心人物と成ったFicinoの『(アカデミア・プラトニカにおける)1469年の会食を舞台背景とした)Ἔρως (Eros: Amor)について(との副題を持つ)プラトーンの【饗宴】への註解: In Convivium Platonis de Amore Commentarium』(1469年)や『プラトーン神学: Theologia Platonica』(1469年-1474年: 1482年刊)、それに羅訳の『(成立1世紀-3世紀の古代汎神論や覚知主義等の遺産)Hermes文書: Corpus Hermeticum』(1463年: 1471年刊)や『プラトーン対話篇』(1463年-1468年: 1484年刊)等で、この後ラファエロが『アテーナイの学院』を創作した時には、フィチーノの羅訳で、3世紀Πλωτίνος(Plotinos)著『Ἐννεάδες』(1484年-1492年: 1492年刊)、プローテューノスの弟子Πορφύριος(Porphyrrios)の残存文献、5世紀アカデメイアの学頭Πρόκλος(Proklos)の『神学 綱要: Στοιχειώσις θεολογική』(1488年)、更に『Διονύσιος(Dionysios) Ἀρειοπάγιτης(Areiorpagites)文書』(1492年)、即ち『神秘神学論: Περί μυστικῆς θεολογίας』(PG. Tom.3. Col.997-1064)、『神名論: Περί θεῶν ὀνομάτων』(PG. Tom.3. Col.585-996)、『天上位階論: Περί οὐρανίας ἱεραρχίας』(PG. Tom.3. Col.119-370)が出揃っていた。

これ程プラトーン学派関係の基本文献を15世紀後半にフィチーノが熱心に翻訳した理由は、それ以前に羅訳が十分無かった故である。実際エックハルトの利用出来得た羅訳『プラトーン対話篇』は、400年前後成立のCalcidius註解『Τίμαιος: Timaios』前半17A-53C訳(公刊9世紀前半)

と12世紀Aristippus訳の『Μένων : Menon』と『Φαίδων : Phaidon』で、彼の没後百年程15世紀前半に漸くBruni訳(『Επιστολαί : 書簡』・『Φαίδων : Phaidon』・『Συμπόσιον : 饗宴』)終結部215A-222B・『Γοργίας : Gorgias』・『Φαίδρος : Phaidros』・『Απολογία Σωκράτους : Sokratesの弁明』・『Κρίτων : Kriton』)が出る。但し、西暦500年頃に新プラトーン学派プロクロスの影響下シリアで成立した『ディオニューシオス文書』は、860年-862年のScotus Eriugena註解付羅訳(PL 122. Col.125-284 : Expositiones / Col.1029-1194 : Versio Operum Dionysii Areopagitae)、更に当文書の新訳(1167年Islam教徒Johannes Saracenus羅訳)から、エックハルトはプラトーン哲学の息吹に触れ得たと思われる。結局プラトーンもアリストテレスも印刷されるのは16世紀で、最古の印刷本プラトーンは1513年Venezia刊Aldina版、今日の底本Stephanus版プラトーンは1578年Paris刊、印刷本アリストテレス刊1531年、今日の底本アリストテレスは当「離在」論で引用する1831年Berlin刊Immanuel Bekker編集Akademie版Aristotelis Opera(復刻Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1960. Volumen 1[1頁-789頁]-Vol.2[791頁-1462頁])であるが、羅訳アリストテレス著作類は、当時の僅かなプラトーンの羅訳とは正反対に、盛期Schola哲学時代を経た13世紀後半には出揃っており、1260年頃誕生のエックハルトは十分それら羅訳アリストテレスを活用出来たと考えられる。

新たな古代ギリシア文芸復興は、それだけでは無かった。実はプロクロスの『神学綱要』の抜粋が、9世紀Arabia文芸復興の成果、アリストテレス *ارسطاطاليس* 著『純粹(محض)善(الخير) (الخير) τὸ ἀγαθόν[に関して]の(في)論(كلام) : *كلام في محض الخير*』、当著は興味深い事に、新プラトーン学派の成果であるにもかかわらず、アラビア思想界における第一の師[معلم]アリストテレス【第二の師はal-Farabi(الفارابي)(870年頃-950年)】の著書と成っている。これが12世紀スペインの都市Toledoで『諸原因論(原因)論』(Liber de causis)と題されて羅訳され、13世紀中葉には、『純粹 ἀγαθόν(善)の註解に関するアリストテレスの書』(Liber Aristotelis de expositione Bonitatis purae)と、アラビア語原典『純粹(محض)善(خير) : ἀγαθόνの論』由来の題名で、エックハルトの先輩Thomas Aquinasが居たパリ大学の授業科目に記載されていた。ここで興味深い点は、新プラトーン学派とアリストテレスとの両者を相互に、対立させ区別するよりも、むしろ織り合わせている事である。この線でエックハルトのアリストテレス理解も成立する。とにかくトーマース(1225年-1274年)は当著に関し既に相当な見識を有しており、『諸原因論へ[の註解] : In Librum de Causis (1269年)で、まず『神学綱要』(elementatio theologica)に言及し(et in graeco quidem invenitur sic traditus liber procli platonicis, continens ccxi propositiones, qui intitulatur elementatio theologica; in arabico [...])、直後de arabico translatum(アラビア語から翻訳され)た『諸原因論』(liber [...] de causis)を、videtur ab aliquo philosophorum arabum ex praedicto libro procli excerptus(アラビアの哲学者達の誰かによる前述のプロクロスの著書からの抜粋と思われる)と指摘する(Thomae Aquinatis Opera omnia. Vol.1-Vol.7. Stuttgart [Bad Cannstatt] Frommann-Holzboog 1980. Vol.4. «Commentaria in Aristotelem et alios». Paginae 507-520. «In librum de causis». Pagina 507左段)。当然エックハルトも当『諸原因論』に関しトーマースの「抜粋」説を認め、結局プラトーン学派の成果と看做したと考えられる。更に時代の要請はliber excerptus(抜粋文書)だけに満足せず、1268年にはプロクロスの羅訳『神学綱要』(Elementatio theologica)も公刊される。やがて『神学大全』(1265年-1274年)の著者トーマースが没するのに対し、1260年頃に誕生したエックハルトは、新たな時代の成果である新プラトーン学派の著作を旺盛に取り込んでゆく。

但し、アリストテレスに関する限り、エックハルトは盛期スコラ哲学時代13世紀迄の伝統的理解に留まり、15世紀以降プラトーンの小論『アリストテレスがプラトーンと意見を異にする

事柄について』や、ラファエロの絵画『アテナイの学院』に現れた、プラトーンとアリストテレスの相互対立分極化とは反対の道を歩む。そして更に啓蒙期 18 世紀には、「アリストテレスが、^{エムピリスト}Empiristen（^{エムピリスト}経験論者達）の頭目と、他方プラトーンが^{ノオロギスト}Noologisten（^{ノオス}叡智^{ヌース}νόος[=叡智νοῦς]論者達）の頭目と看做され得る。」（Kants Werke. Akademie-Textausgabe. Abdruck der „gesammelten Schriften“（1902ff.）. Berlin. Gruyter 1968. Bd.3. S.551；再版 1787 年 882 頁）と、『純粹理性批判』（初版 1781 年）で^{カント}Kantにより一層鮮やかに色分けされる。だが全体エックハルトが『説教 15』で敢て「^{ヌース}叡智[知性]論者」として敬意を払った「諸先師の最高アリストテレス：^{アリストテレス}Aristoteles [...] Der höchst vnder den maistern,」（Werke I. S.178）も生き続けている。例えば上掲『哲学史』（1948 年/1952 年）第 1 巻でヒルシュベルガーは、まず同時代の専門家 ^{ツルヒャー}J. Zürcher 著『アリストテレス、著作と精神：^{アリストテレス}Aristoteles, Werk und Geist』（1952 年）から、「^{ツルヒャー}Zürcherによれば、アリストテレス著作集の中でお真正と言えるのは、プラトーン哲学である。もっとも最早それは全体の約 4 分の 1 しか[残っていない]であろう。残り全部は^{テオプラスト}Θεόφραστος(Theophrastos)の加筆であり、彼が 30 年間自分の師の手稿類と取り組み、その際それらを抜本的に変更した、と言うことである。」（Bd.1. S.160）と引用した後、更に自説もこう述べる。「アリストテレスは彼のプラトーン駁論にもかかわらず、プラトーン主義から絶縁していない。彼の認識論同様、彼の形而上学でも又、彼は当初プラトーンに背を向けるが、しかし最後には再び彼に復帰するのである。」（Bd.1. S.191）。

大雑把な時代の趨勢は、盛期スコラ哲学時代 13 世紀に頂点をなすアリストテレス熱が次第に冷め、詩歌や芸術の花咲く^{ルネサンス}ルネサンス期 14 世紀以降プラトーン熱が上がる所にある。旧時代に支配的だった国際語ラテン語に代わり、この新時代の成果は多彩な母国語で現れ、^{ダンテ}Danteの『神曲』（1307 年-1321 年）、エックハルトの『[ドイツ語]説教』（1314 年頃-1326 年頃）、^{デカルト}Descartesの『方法序説：^{ディスコルス}Discours de la méthode』（1637 年）という姿を取る。こうして時代の思潮はアリストテレス^{ルネサンス}ルネサンス期盛期スコラ哲学時代 13 世紀に別れを告げ、アカデミア・プラトニカ創設やプレートン来訪（1438 年）とプラトーン学派関係文献フィチーノ羅訳（1463 年-1492 年）の 15 世紀を目指す。1329 年彼に異端宣告を發した法王は、同時代の成果『神曲』で詩聖に告発され、当ローマ法王^{カオル}「Cahors 人（^{イオアンネス}Ioannes XXII）は」、七大罪の一つである彼の食欲が注目され、「私達の血を、… 飲もうと身構えている」（『天国』27）【Del sangue nostro Caorsini e Guaschi [=Clemens V] (58/59) s'apparecchian de bere: [...]】（Opere. Firenze. Società Dantesca Italiana 1960. 774 頁）と膏血を絞る政治支配者として告発されるとか、「だが汝、[後に取り消し手数料を徴収する目的で]専ら帳消しにする為に[破門や懲戒を]記帳する者よ」（『天国』18・130）【Ma tu che sol per cancellare scrivi, (130/131) [...]】（744 頁）と糾弾されたりしている。因みに、南仏の都市^{カオル}Cahors は『地獄』11・50 で、男色で弾劾された古代都市ソドムと共に、「ソドムと^{カオル}Cahors」（Soddoma e Caorsa : 479 頁）と併記され、高利貸達の拠点ゆえ不道德な^{りんじとく}吝嗇と食欲の象徴として扱われている。実際エックハルトの死後法王が書いた国際語ラテン語の異端宣告文より、母国語イタリア語で高唱された『神曲』の文面の方が、遙かに心に深く響き渡った事は確かである。また^{デカルト}デカルトが『方法序説』末尾で（Œuvres. Paris. Cerf 1897-1913. Tom.6. Pag.77）、「わが師達の言葉である^{ラテン}羅典語よりも、むしろ^{フランス}自国語であるフランス語で私が書いている」ことの根拠として、^{レゾン}raison naturelle toute pure（[自然本性に基づく]生来の全き^{ピュール}純粹[pure]理性[^{レゾン}レゾン]）を挙げているのも、エックハルトが『[ドイツ語]説教 22』で語る^{ルネサンス}lûter vernunft（^{ルネサンス}純粹^{レゾン}叡智[・理性]：^{ルネサンス}Werke II. 254）との関連で興味深い。このように世相は遷り変って往くのであるが、しかしエックハルトのアリストテレス像は、先輩スコラ学者達のそれと比べて、それ程大きな相違は無かったと思われる。実際それは深く形而上学の伝統に根差しているため、その継承発展は言わば持続維持を意味している。ここで保持されるのは、上記ヒルシュベルガーの『哲学史』第 1 巻の言葉なら、「プラトーン哲学」（Bd.1. S.160）とか「プ

ラトーン主義」(Bd.1. S.191)であり、これが実は9世紀アラビア文芸復興よりイタリア文芸復興に至るまで連綿と形而上学の尾根を形成しているのである。

新プラトーン学派プロクロスルネサンスの『神学綱要』が、9世紀アラビア文芸復興ルネサンスでアリストテレス著『純粹善の論』へと変貌し、12世紀『諸原因論』(Liber de causis)と題して羅訳され、更に『諸原因論』が13世紀スコラ哲学盛時、『純粹善』の註解に関するアリストテレスの書』として出回る。この様な新プラトーン学派とアリストテレス哲学との織り合わせは、当『純粹善』(諸原因論)と共に双壁アゴトン為すアラビア経由12世紀羅訳の『アリストテレス神学』(sapientissimi philosophi Aristotelis Stagiritae theologia : 最高の知恵を有した[Μακεδονία (Makedonia)の]Στάγιρος (Stagiros)市の哲学者アリストテレスの神学)にも認められる。これが実は『Enneades』第4巻-第6巻の翻案であり、この事は暗黙の了解であろうが、これを敢て『アリストテレス神学』と命名してある所に、Platonis Aristotelisque concordia (プラトーンとアリストテレスの協和・一致)が窺うかがい知られる。この羅訳『アリストテレス神学』の形を取り新プラトーン学派プロローティエノスの思想が中世末期、エックハルト達スコラ学者の知識に流れ込む。但し、この第4巻-第6巻には、アリストテレス批判(『エネアデス』第5巻・1・9)、「アリストテレスは後世、一方で第一の者を離在と、かつ叡智界の者と言いながら、他方それが自身を知性認識すると言うから、逆にそれを彼は第一の者と為していない。【Αριστοτέλης δὲ ὑπερὸν χωριστόν μὲν τὸ πρῶτον καὶ νοητόν, νοεῖν δὲ αὐτὸ ἐαυτὸ λέγων πάλιν αὐτὸ οὐ τὸ πρῶτον ποιεῖ】(Plotins Schriften. Bd.1-5. Philosophische Bibliothek. Bd.211-215. Hamburg. Felix Meiner 1956-1967. Bd.1. S.230)が有るが、これがアラビア語の翻案に欠落するのは自然の成り行きであろう。しかし他方プラトーン主義そのもの自体は当の翻案にも豊富に盛り込まれている。『ارسطاطاليس』(アリストテレスの)اثولوجيا(神学)のكتاب(書)](Dieterici編亜独 Die sogenannte Theologie des Aristoteles. Leipzig. Hinrichs 1882年[亜語原典]; 1883年[独訳]; 復刻1969年; Friedrich Dieterici „Die Philosophie bei den Arabern im X. Jahrhundert n. Chr.“ Bd.1-14. 1958-1986. Hildesheim. Olms 1969. Bd.11[亜語原典]; Bd.12[独訳])は第1章で、【神々しく(الالهى) 気高い(الشريف)プラトーン(افلاطون)】(原典9頁18/独訳10頁)【Der erhabene göttliche Plato】を話題とする前に、紀元前500年前後のソクラテース以前の思想家 Ηράκλειτος(Herakleitos)を彼の先駆者、即ち理念ιδέα探求のNoologist(叡智νοῦς論者)として重視している。【かつ私は想起した(وتذكرت)[かの]事(عند)かの(ذاك) Herakleitos[の事]を(ارقليطوس)と言うのは、彼は(فانه)[彼は]命じた(امر)追求を(بالطلب)かつ探求を(البحث)魂の本質]に関する(عن)本質(جوهر)[靈]魂の[本質]に関する追求かつ探求を(النفس) [3]4 (かつ熱望を[命じた](والحرص)[上昇]への[熱望](على)上昇[への熱望](الصعود)[かの]世界[への]上昇[の]世界[の]世界(العالم) 崇高な[世界](الشريف)[崇高な]至高の(على)世界への上昇への熱望を彼は命じた) … (原典9頁3-4/独訳9頁)【Hierbei erinnerte ich mich an Heraklit. Der befahl ja nach der Substanz der Seele zu suchen und zu forschen [...]](第1章)。

これは既に『エネアデス』5・1・9の上記アリストテレス批判の直前で、プロローティエノスが「ヘーラクレイトスも一者を永遠で、叡智νοῦς界[叡智界]の者であることを知っていた【και Ηράκλειτος δὲ τὸ ἐν οἶδεν αἰδίον καὶ νοητόν (Bd.1. S.230/S.231) Auch Heraklit hat gewußt daß das Eine ewig und geistig ist,】と述べている事も背景にあるが、ここで例のラファエロ作『アテーナイの学院』を想い起こすと、彼が尊敬していた『モナ・リザ : Monna Lisa』(1500年-1510年頃)の画家、Vinci村のLeonardo自身が描いた自画像の風貌を彷彿とさせるプラトーンの前方で、当ヘーラクレイトスがMichelangelo自身、或いは彼が礼拝堂 Cappella Sistinaの天井画に描いたRodin作『考える人 : Le Penseur』(1880年)の原型エレミアを偲ばせる姿で、深く物思いに耽り思索しており、他方アリストテレスの風采は上らない。ここで重要な点は、当絵画がプラト-

ン中心に描かれている事、および彼の理念ιδέα追求・探求の先駆者としてヘーラクレイトスがミケランジェロを思わせ厳然と控えている点である。【言った(قال) [11|12] プラトーンが(افلاطون)次の事(ان) [靈魂の(إيتتراق) 解放は(اطلاق) 靈魂の[解放は](النفس)[足枷(من) 靈魂の 足枷(وثاقها)]からの解放は] 正に(انما)[解放は]それ[即ち](هو)靈魂の脱出(خروجها)[洞窟(من) からの[脱出](من)[この世界の] 洞窟[からの](مغار)この[世界の洞窟からの](هذا) [12|13] [この]世界の[洞窟からの脱出であり、] (العالم) かつ上昇(والترقى) [叡知的世界]への[上昇](الى)靈魂の世界[への](عالمها)[靈魂の]叡知[عقل]的 [世界への上昇である、と言った](العقلی) …】(原典 10 頁 11-13) 【Dann sagt Plato, dass die Befreiung der Seele von ihrer Fessel nur in ihrem Herausgang aus der Höhle dieser Welt und in der Erhebung zu ihrer Geistwelt beruhe. […]】(『アリストテレス アリスاطαλλίς 神学』第1章)。

上記『純粹善の論』、別名『諸原因論』(Liber de causis)、即ち『純粹善の註解に関するアリストテレスの書』でも、プラトーン哲学で最も重要で再三話題の「善 (ἀγαθόν) の理念 (ιδέα)」:『国家』6//7:505A/508E//517B: Platons Werke. Bd.4. S.530/S.542/S.562; Tom.7. Part.1. p.132/p.138/p.149】が「純粹善」(Bonitas pura) と命名されている。これをアリストテレスは「善 そのもの自体 (ἀγαθὸν καθ' αὐτό)」(996A24) とか「善 (ἀγαθόν) の本性 (φύσις)」(996A23) と『形而上学: Τὰ Μετὰ τὰ φυσικά』3・2 で述べ、更に『ニーコマコス倫理学』1・7 で「探求される ἀγαθόν (善): τὸ ζητούμενον ἀγαθόν」(1097A15) と「諸 τέλος (目的[因]): τὰ τέλη」(1097A26) を踏まえ、「最高善 (ἄριστον) が、τέλειόν τι (何らかの究極) [目的因] と思われる。: τὸ δ' ἄριστον τέλειόν τι φαίνεται。」(1097A28) と自説を開陳している。当然この「最高善 ἄριστον 自体の [思惟] が νοήσεως νόησις (思惟 νόησις の 思惟 νόησις: 純粹思惟[そのもの自体]) に帰着する事は、『形而上学』12・7 と 12・9 で確かめられる。「思惟 [行為] νόησις 自体は、最高善 ἄριστον 自体の [思惟 であり]、この最上 μάλιστα [の 思惟] は、最上の事の [思惟 であり]、自身を 思惟 するのだ、叡智 νοῦς は、叡智界 νοητόν (叡智の[〜]) [〜] の関与に 抛り。」(1072B18-20: 12・7/9: 1074B33-35)

「故に [叡智 νοῦς] が 自身を 思惟 する。…そして、この [叡智 νοῦς] の [思惟 [行為] νόησις] が、νοήσεως νόησις (思惟 νόησις の 思惟 νόησις: 純粹思惟[そのもの自体]) である。」(『形而上学』第12書)。

話題の「純粹 ἀγαθόν (善)」を『アリスاطαλλίς (アリストテレスの) αὐτολογία (神学) (書)』第1章では、(افلاطون) プラトーンが語る。【…第一の創造者は(البارى) 第一の[創造者は](الاول) …原因(علة)[叡知的]諸存在者(الائيات)[原因]であり]叡知的 (العقلية)[諸存在者の原因]であり … 善 (الخیر) 純粹な[善]であり(المحض) [かつ以下の]善 [である](الخیر) … (S.12/S.13) … してそれは (هو) 創造者(البارى)であり、[即ち]これは(الذی)あれ(هو)[即ち] 善 (خیر) 純粹な[善]である (محض)

(原典 12 頁-13 頁: 第1章)。この「第一の創造者」である「純粹善: 善 (خیر) 純粹な[善] (محض)」を『Aristoteles 神学』第10章では、【一者(الواحد) 純粹な[一者](المحض): 純粹一者】(原典 136 頁/独訳 137 頁) 【Der Eine, der Reine!】と呼ぶ。文法上の性が男性と女性のみでアラビア語には中性が無い故、中性は男性に組み込まれる結果、独訳も男性を示しているが、これが第1章(独訳 13 頁)の中性【das reine Gute】(خير محض) と同一であり、本来プラトーン学派で重視された上記の中性の τὸ ἓν (一者: das Eine) である点を留意する必要がある。そして 亜語原典の表現で目に付くのが「純粹 (محض) と云う言葉で、プラトーンの「善の理念」(τὸ τοῦ ἀγαθοῦ ιδέα) が「純粹な善 (خير محض)、新プラトーン学派の「一者」が「純粹な一者 (المحض الواحد) と成る。これは後世エックハルトが「純粹 叡智: lûter vernunft」(『説教 22』: Werke I. S.254/258) とか「純粹 叡智: intellectus purus」(『ヨハネ福音書註解』第38節: Werke II. S.524) を、また 論述『離在について』で「純粹な離在: lûteriu abegescheidenheit」(S.434) とか「離在の純粹性: abegescheideniu lûterkeit」(S.452) を語る時の背景として興味深い。

同じ事を語る場合に表現が変わる点では、「νοῦς χωριστός: nous choristos: 離在χωρίς の叡智」

(アリストテレス『^{プシューケー}『^{アゲーニス}靈魂論』3・5 : 430A17) も、スコラ哲学盛期 13 世紀には「能動[知性・] 叡智」(intellectus agens : intellectus efficiens) という形で議論的となる。トーマースも『[アリストテレスの^{アニマ}靈魂論の諸書へ[の註解]: In Libros de anima』(1268 年) 第 3 書・第 10 講(Opera omnia. Vol. 4. «Commentaria in Aristotelem et alios». Paginae 364-365) で、また^{グリュンディオヒ}Gründigの^{エックハルト}Eckhart (Meister Eckharts Werke I. 849 頁の註 : 師 Eckhart とは別人の Eckhart) も『能動[知性・] 叡智 と可能[知性・] 叡智 : Von der wirkenden und möglichen Vernunft』(1302 年 - 1323 年頃) でこれを扱っている。改名の源は紀元 200 年前後の高名なアリストテレス学者、北^{アフリカ}Africaの^{キュレネー}Kyrene)の^{アプロディシイアス}Aphrodisias)の^{アレクサンドロス}Alexandros)で、彼が彼自身の『^{アゲーニス}靈魂論 : Περὶ ψυχῆς』(Commentaria in Aristotelem Graeca. Supplementum Aristotelicum. Vol.II. Pars I. Alexandri Aphrodisiensis De Anima Liber cum Mantissa. Berlin. Reimer. 1887. 1 頁-186 頁)

で、「νοῦς χωριστός : 離在^{χωρίς}の叡智」(89 頁 11) や「ὁ θύραθεν νοῦς : 外からの叡智」(111 頁 34 : θύραθεν : deforis : 下記『動物生成論』2・3 : 736B28) や「^{ダイタス}神的な^{ヌース}叡智 : ὁ θεῖος νοῦς」(112 頁 27) を「^{ヌース}νοῦς ^{ポイエットコス}ποιητικός : ^{ヌース}nous ^{ポイエットコス}poietikos : [能動的] ^{ポイエットコス}創出的 [=^{ポイエットコス}創出者^{ポイエットコス}ποιητής] の^{ヌース}叡智」(88 頁 24) と命名し(Éduard Zeller „Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung“ III.1. Leipzig. Fues 1880. S.789-801)、これが「能動 [知性・] 叡智」の元となる。この点エックハルトは「^{ヌース}νοῦς ^{χωριστός}χωριστός : 離在^{χωρίς}の叡智」の方を、自分の根本概念 abegescheidenheit (離在) に結びつけ、その内容を深め一層プラトーン哲学に近付け、更にアリストテレス『^{アゲーニス}靈魂論』3・4 (429B22-24) に引用された^{アナクサゴラス}Ἀναξαγόρας)の^{ヌース}νοῦς (叡智) を、彼の『ヨハネ福音書註解』第 38 節で「^{インテレクトウス}純粹叡智 (intellectus purus)」と名付け、「何者とも共有し無い (nihil nihil habens commune)」

(Werke II. S.524) 【^{ヌース}μηθεὶν ^{ヌース}μηθὲν (429B23/24) ἔχει κοινόν】と「離在」を力説する。実際アナクサゴラス自身『断片 12』で、^{ヌース}νοῦς (叡智) を「何者とも混じらず … (μέμεικται οὐδενί [...]) 【アリストテレス『^{アゲーニス}靈魂論』3・4 : ἀμιγῆ (混じり気なく純粹) εἶναι, ὥσ- (429A18/19) περ φησὶν Ἀναξαγόρας [...]], … (S.37/S.38) … ^{カタルワタモノ}καθαρώτατον (最も純粹なもの)」と叙述している (H. Diels 独訳・W. Kranz 編 „Die Fragmente der Vorsokratiker“ 1903. 6.Aufl. 1951-1952. Bd.2)。話題の『^{アゲーニス}靈魂論』3・5 でアリストテレスは、まず「^{ヒューレ}質料 : ὕλη」(430A10) として「^{パンタ}万有諸物 (πάντα) が^{デユナミス}δύναμις (可能態) に」(430A11) 在る反面、この「この質料に対する^{テクネー}τέχνη (学芸・技術) の様に、^{パンタ}万有諸物を^{ポイエットコス}ποιεῖν (創出する) 点で、^{アイテイオン}αἰτίον (原因) がまた^{ポイエットコス}ποιητικός ([能動的] 創出的) である」(430A12-13) と述べ、^{ヒューレ}質料 (ὕλη) と、^{ヒューレ}質料 (ὕλη) と、^{エイドス}εἶδος (形相) を付与する[能動的] ^{ポイエットコス}創出的な^{アイテイオン}原因、この双方の相互関係を留意し、これを^{プシューケー}ψυχή ([靈魂]) に宿る^{ヌース}νοῦς (叡智[・知性]) に関しても当て嵌める。すると「そうした[質料の様]に可能態に在る^{ポイエットコス}受動的な 叡智[・知性](^{τοιούτος}τοιούτος νοῦς)」(430A14) と、「^{ポウ}φῶς (光) の様に、… ^{パンタ}万有諸物を^{ポイエットコス}ποιεῖν (創出する) 点での[叡智]」(ὁ δὲ τῷ πάντα ποιεῖν [...]) οἶον τὸ φῶς : 430A15) と、に二分される。光の比喩が、「^{デユナミス}δύναμις (可能態) に在る[暗くて見えない]諸^{クロマ}χρῶμα (色彩) を、[可視の] ^{エネργεια}ἐνέργεια ([能動]現実態) に在る諸^{クロマ}χρῶμα (色彩) に、^{ポウ}φῶς (光) が^{ポイエットコス}ποιεῖ (創出する)」(τὸ φῶς ποιεῖ τὰ δυνάμει ὄντα χρώ-|ματα ἐνεργεία χρώματα. : 430A16-17) と語られ、この直後すぐ「又この様な^{ヌース}νοῦς (叡智[・知性]) は、[^{プシューケー}ψυχή ([靈魂]) から] ^{χωριστός}χωριστός (離在的) であり、^{ἀπαθής}ἀπαθής (非受動的) であり、^{ἀμιγής}ἀμιγής (非混合で純粹) であり、その^{ουσία}οὐσία (本質 [・実体・実在・存在]) は ^{エネργεια}ἐνέργεια ([能動]現実態) である。」(καὶ οὗτος ὁ νοῦς χωριστός καὶ ἀπαθής καὶ ἀμιγής τῆ οὐσία ὦν ἐνεργεία. : 430A17-18) とあり、「^{ヌース}νοῦς ^{χωριστός}χωριστός : nous choristos : 離在^{χωρίς}χωρίς の^{ヌース}叡智^{νοῦς}νοῦς」が登場する (アリストテレス ^{アριστοτέλης}Ἀριστοτέλης『^{アゲーニス}靈魂論』3・5 : 430A10-25)。

文脈上 ^{χωριστός}χωριστός (離在的) ^{νοῦς}νοῦς (叡智[・知性]) が、^{ポイエットコス}ποιεῖν (創出する) 点で ^{エνεργεια}ἐνέργεια ([能動]現実態) に在り、^{ἀπαθής}ἀπαθής (非受動的) である事は明らかなので、アレクサンドロスが敢て「^{ヌース}νοῦς ^{ποιητικός}ποιητικός (nous poietikos) : [能動的] ^{ポイエットコス}創出的 [=^{ポイエットコス}創出者^{ポイエットコス}ποιητής] の^{ヌース}叡智」

知性)の眼目が ποιῆν (創出する) ἐνέργεια ([能動]現実態) に在る事は疑い得ない。要ほどの言葉に力点を置くかで、西欧ラテン中世は ἐνέργεια ([能動]現実態: actus: effectus) に着眼し、本来 actus ([能動]現実態: effectus) は動詞[不定詞]agere (実行・活動する: efficere) の完了[過去]分詞[男性・単数]actus (effectus) に呼応するので、この動詞の[現在]能動分詞agens (活動する・能動の: efficiens) を形容詞として名詞intellectus (叡智[・知性])に附し、「能動[知性]・叡智」(intellectus agens: intellectus efficiens) として使うことに成った。そして実は既に当着眼点を、アラビア文化圏における第二の師al-Farabi[870年頃-950年]【ويغور خه لقينىڭ [...] وُلوغ ألىمى [...] فارابى: Farabi - [...] ウイグル族の、中世に生きていた偉大な学者】(大学書林1991年『現代ウイグル語四週間』101頁)が、【الواحد(一者: τὸ ἓν)】を【بالفعل([能動]現実態における)عقل(叡智[・知性])】(原典9頁19/独訳13頁)【[...] «der Eine» [...] ein aktueller Intellect】と語ることによって明示している(亜語原典Fr. Dieterici編1895年/独訳1900年。Leiden. Brill:復刻Hildesheim. Olms 1985年)。これは930年頃のal-Farabi著『الفاضلة(優良)المدينة(都市)اهل(住民)آراء(諸見解): 諸見解(に)ラアイ(見解)في(に)フィ(に)رساله(論文)』(原典V頁に„Ueber die Ansichten der Bewohner der Vorzugsstadt“/独訳題名: Der Musterstaat von Alfārābī: 模範都市国家)第5章からで、その第14章では【形相において(بصورته) 叡智[・知性]は(عقل) [能動]現実態に[在り] (بالفعل) かつこれは (هو) 思惟する (يعقل) [12|13] 形相において (بها: in ihr) [自身の 離在の] 本質[ôât]を(ذات) 離在の (المفارق) [本質を]】(原典24頁12-13)。ここでactuell Intellect (現実態に在る叡智) を受けて der Immaterielle (非質料ὄλη的な者) と翻訳(独訳38頁)する理由は、「فعل(現実態)に在る عقل(叡智)」が、可能態に在る受動的な【المادة (質料: 質料ὄλη: materia)】(原典24頁18)から自由な ἐπέκεινα(彼方)に超越し、【مفارق (離在)】(原典24頁13)の【الصور (形相: 形相εἶδος: forma)】(原典24頁7)の理念界に在る故である。これを上記アプロディエーシアス(الإفروديسي)のアレクサンドロス(الاسكندر)著のギリシア語原典の失われた亜訳『万有(πάντων ἡ κόσμος宇宙)の諸原理(ἀρχαί: 諸ἀρχή原理: 諸ἀρχή原理)に関する理論に関する論文【في القول في مبادئ الكل】(Islamic Philosophy, Theology and Science. Texts and Studies. Vol. 44. Leiden. Brill 2001. p.42)は、【[諸 عقل叡智]: 諸叡智(العقول)、離在の[諸叡智] (المفارق)可能態[から] (القوة) [離在の 諸叡智]、かつ質料[から] (والمادة) [離在の 諸叡智] … 叡智の[能動]現実態(فعل العقل)、それは(هو) 生命(الحياة) かつ 叡智(والعقل)、[叡智]これは(الذي) [能動]現実態に(بالفعل) [在り]、[叡智]これは (هو) [永遠の]生命(الحية)、永遠の (الأزلية) [生命]。】(p.110)と記している。

またアレクサンドロスの『アリストテレース「形而上学」註解』(Commentaria in Aristotelem Graeca. Vol.I. Alexandri in Metaphysica. Berlin. Reimer. 1891) 694頁には「当叡智は即ち想念界の形相を掴み、かつ質料から現実態の形相を離在させ [38/39] かの叡智界を創出し、自身は現実態の叡智と成る。」【ὁ γὰρ νοῦς τὸ [37/ 38] εἶδος τοῦ νοουμένου λαβὼν καὶ τῆς ὄλης αὐτὸ χωρίζων κατ' ἐνέργειαν [38/39] ἐκεῖνό τε νοητὸν ποιῆι καὶ αὐτὸς κατ' ἐνέργειαν νοῦς γίνεται.】とあり、離在(χωρίς)の形相に現実態の叡智が親和する一方、他方アリストテレース『[靈]魂論』3・5の上記「そうした[質料の様に可能態に在る] 叡智(τοιούτος νοῦς)」(430A14)、即ち「受動的な叡智(παθητικὸς νοῦς)」(430A24)は軽視される。これを12世紀Averroës【ibn-Rusd: ابن رشد】(1126年-1198年)は批判し、『[靈]魂論』書の大註解『الشرح الكبير لكتاب النفس』(1190年前後: «Grand Commentaire sur le Traité de l'Âme d'Aristote» en deux volumes. Tunis. Carthage. Académie Tunisienne des Sciences des Lettres et des Arts. «Beit Al-Hikma». Vol.2. Texte restitué à l'arabe par B. Gharbi de l'Université de Tunis. 26頁-329頁: 羅訳Aristotelis Opera cum Averrois Commentariis. Venetiis apud Iunctas 1562-1574. 復刻. Frankfurt a.M. Minerva 1962. 14 Vol. Suppl.2. Folio 1A-204F; Averrois Cordubensis Commentarium Magnum in Aristotelis De Anima

libros. Massachusetts. Cambridge 1953. Pagina 3-Pag.546) 3・19 末尾(巫 267 頁: 羅 Folio 162E; Pagina 443) で、「[アプロディエスィアスの]アレクサンドロス (اسكندر) よ、もし当質料的叡智 (العقل الهيلواني: intellectus materialis) [νοῦς ὑλικός καὶ φυσικός: 上掲 E.ツエラー『ギリシア哲学…』III.1.796 頁] という名がアリストテレース (أرسطاطالیس) の場合、唯準備 (التهيئة: praeparatio) を意味するだけなら、どうして彼はこれと[創出的]能動叡智 (العقل الفاعل: intellectus agens) の一致と差異の諸点を示し、両者の当比較 (『[靈]魂論』3・5) を為したのであろうか?』と問い、更に『[靈]魂論』3・20 (272 頁: Folio 164E; Pagina 451) で、「他方双方が一者である事に関しては (وأما كونهما واحدا: Sunt autem vnum.)、即ち (فلان: quia)、質料的叡智 (العقل الهيلواني: intellectus materialis) は、能動[叡智]により (بالفاعل: per agentem)、[現実態へと]完成され (يكتمل: perficitur)、且それ[能動叡智]を知解する (ويفهمه: et intelligit ipsum)。」と結論を述べる。ここの眼目は、人間の叡智的諸力が遂には能動叡智の現実態へと昇華され、根源の叡智たる一者に回帰してゆく事と考えて良いであろう。

『優良都市の住民の見解に関する論文』も同旨で、[質料的叡智(العقل الهيلواني)] … [6|7] … それも(هو)また(ايضا)叡智に(عقلا)、現実態に[在る](بالفعل) [叡智に成る]、[即ち以下の]後に(بعد)、以下(ان)[即ち可能態の叡智で]在った(كان)[後に]、叡智で(عقلا)、可能態の(بالقوة)[叡智で在った後に] [7|8] … 離在の叡智(العقل المفارق) … [8|9] … 能動叡智(العقل الفاعل) (原典 45 頁 6-9/独訳 71 頁)

【auch wird er (der Stoffintellect) actueller Intellect, nachdem er vorher nur potentiell war. […] der schaffende Intellect】とあり、根源の一者に回帰してゆく当アラビア哲学の伝統こそ Eckhart の先達と考えられ、実際これを al-Farabi と Averroës の間で重鎮なす Avicenna [ibn-Sînâ: ابن سينا] (980 年-1037 年) が『形而上学』(『كتاب الشفاء: 治癒の書』の「الاهيات: 神学」) で見事に纏め、この際当著で彼は先輩 al-Farabi が『都市論』や後述『叡智[・知性]に関する論文』で析出した【能動叡智(العقل الفاعل)】や【離在(مفارق)】を重視している: 【intelligentia agens (العقل الفاعل)】(Avicenna latinus. Édition critique publiée sous le patronage de l'union académique internationale. Liber de philosophia prima sive Scientia divina. Leiden. Brill. I-IV. 1977/ V-X. 1980/ Lexique 1983: 本文 160/364/368/457/462/475/476/484 頁/辞典 161/317 頁)。また『都市論』は Aristoteles の対概念、【مادة(質料) [20|21] وصوره(と形相)】(原典 5 頁 20-21/独訳 7 頁)【Stoff und Form】、【بالقوة: 可能態に】(دونامي) (原典 5 頁 12) と【بالفعل: [能動]現実態に: 現実態に ενεργεία】(原典 24 頁 12) を基軸に論述が展開しているが、しかし他方その題名にある المدينة(都市) が、その二様の独訳、Stadt (都市) と Staat (国家) の示す如く、アテーナイや بغداد(Bagdâd) の類を指し、その都市国家の制度 (Πολιτεία: Politeia) を、当然プラトーンの『国家』(Πολιτεία) を念頭に置いて扱っている点からも、ここに「プラトーンとアリストテレースの協和・一致」を見逃すことが出来ない。その眼目は、[能動]現実態に在る مفارق (離在) の相で、アリストテレースの νοῦς χωριστός(離在の叡智) が【بالفعل:[能動] 現実態の] عقل(叡智[・知性])】として、プラトーンの『国家』で「善の理念」を目指す「οὐσία 眞實在 (存在 ὄν) の彼方」【ἐπέκεινα τῆς οὐσίας】(509B) への探求を重ね合わされる点である。

実際 al-Farabi には論文『プラトーンとアリストテレースの調和』(Die Harmonie zwischen Plato und Aristoteles: Fr. Dieterici „Alfârâbî's philosophische Abhandlungen aus dem Arabischen übersetzt“ Leiden. Brill 1892. S.1-53) があり、当論で彼は上記プラトーン著『アリストテレースがプラトーンと意見を異にする事柄について』の要点 (上掲ヒルシュベルガー『哲学史』Bd.2. S.11)、「アリストテレースが(彼により)拒否された理由」、即ち「世界の永遠を説き、魂の個人人格上での不滅、及び神の摂理を否認している」事、「反対にプラトーンは ἐπέκεινα(彼方)の世界、及び何より創造神デーミουργΟΣを識るとの旨」を留意し、悉く前者が後者と同意見である点

事)を確認したが、これに対応するのが『神学綱要』命題 186、「すべて ψυχή[^{プシューケー}霊]魂は非物体[・肉体]的 ουσία[^{ウーシアー}実体・^{ウーシアー}本質・^{ウーシアー}真実在]で、σῶμα[^{ソーマ}物体[・肉体]]から χωριστή[^{ウーシアー}離在的 : ^{ウーシアー}chooristee]である。」(Pagina 162)で、更に ψυχή[^{プシューケー}霊]魂から^{ヌース}叡智が^{ウーシアー}χωριστός[^{ウーシアー}離在的]で、かつ^{ヌース}叡智から τὸ ἐν[^{ト・ヘン}一者]が^{ウーシアー}χωριστόν[^{ウーシアー}離在的]となる。「その第一始源者自体は^{ウーシアー}叡智から^{ウーシアー}χωριστόν[^{ウーシアー}離在的]である」(『神学綱要』命題 161 : Pagina 140)【αὐτὸ δε τὸ πρῶτος ὄν χωριστόν ἐστὶν ἀπὸ τοῦ νοῦ,】。この^{ウーシアー}χωριστόν[^{ウーシアー}離在的]は、^{ウーシアー}プロテーノスの『エネアデス』5・1・10、「ὄν[^{ウーシアー}存在 : ^{ウーシアー}真実在]在 οὐσία」の τὸ ἐπέκεινα[^{ト・ヘン}彼方]が τὸ ἐν[^{ト・ヘン}一者]で、… 次が ὄν[^{ウーシアー}存在 : ^{ウーシアー}真実在]在 οὐσία」と^{ヌース}叡智で、第三が ψυχή[^{プシューケー}霊]魂の φύσις[^{フィュシス}本性]であり、…」(Bd.1. S.232)で語られた ἐπέκεινα[^{ト・ヘン}彼方]に呼応し、この際 τὸ ἐν[^{ト・ヘン}一者]を振り返り観るのが、「純粹叡智(καθαρός νοῦς)」に他ならない。【καθαρῶ τῶ νῶ τὸ καθαρώτατον θεᾶσθαι καὶ τοῦ νοῦ τῶ πρώτῳ.】(Bd.1. S.178 : 『エネアデス』6・9・3)。そして根源一者と^{ヌース}叡智の繋がりが、『エネアデス』5・1・7で ὄρασις[^{ウーシアー}瞥見 : ^{ウーシアー}Erblicken : S.225]と言われている^{ヌース}叡智自体、及び^{ヌース}叡智の働き、即ち ἐπιστροφή[^{ウーシアー}振り向く事 : ^{ウーシアー}回帰]で、これが言わば νοήσεως νόησις[^{ウーシアー}思惟[の中]の^{ウーシアー}思惟]と考えられる。「だが^{ヌース}叡智ではない、かの者は。如何にして全体それが^{ウーシアー}νοῦς[^{ウーシアー}叡智]を発生[・誕生]させるのか? さて、[それは]自身の方へ ἐπιστροφή[^{ウーシアー}振り向く事]で、[それが自身を]観た事においてであり、この ὄρασις[^{ウーシアー}瞥見]、これが^{ヌース}叡智である。」【ἀλλ' οὐ νοῦς ἐκεῖνο· πῶς οὖν νοῦν γενᾶ; ἢ ὅτι τῇ ἐπιστροφῇ πρὸς αὐτὸ ἑώρα, ἢ δὲ ὄρασις αὕτη νοῦς.】(Bd.1. S.224)。

プラトーン自身と彼の学派は、哲学者の中の哲学者ソークラテースを ὄρασις[^{ウーシアー}瞥見 : ^{ウーシアー}Erblicken]し、彼の方へと ἐπιστροφή[^{ウーシアー}振り向く事]で思索への道を辿り始める。アリストテレスの『形而上学』は、このような邂逅を導きの星としていない。その νοήσεως νόησις[^{ウーシアー}思惟[の中]の^{ウーシアー}思惟 : ^{ウーシアー}純粹思惟]は、むしろ探求に専念し精神集中し物に打ち込む研究 ἐνέργεια[^{ウーシアー}活動[現実態]]だと考えられ、これが θεωρία[^{ウーシアー}観想]だと思われる。「… ἐνέργεια[^{ウーシアー}活動[現実態]]。… [16|17] … ἢ τελεία εὐδαιμονία[^{ウーシアー}究極の幸福]。… [17|18] … θεωρητικῆ[^{ウーシアー}観想] θεωρίας[^{ウーシアー}の] ἐνέργεια[^{ウーシアー}活動[現実態]]」(『ニコマコス倫理学』10・7 : 1177A16-18)。諸説教でエックハルトが先達の中の先達イエスを具体的な範例として再三問題にするのに対し、トーマスは『神学大全』で全体アリストテレス風研究 ἐνέργεια[^{ウーシアー}活動]に倣うのを旨としており、例えば前掲『諸原因論へ[の註解] : In Librum de Causis』(1269年)冒頭で、只今触れた『ニコマコス倫理学』10・7 (1177A16-18)を鑑みて述べる。「哲学者[の中の哲学者アリストテレス]が『倫理学』10で言っている様に、人間の^{ウーシアー}ultima felicitas[^{ウーシアー}至福 : ^{ウーシアー}τελεία εὐδαιμονία[^{ウーシアー}究極の幸福]]が在るのは、人間の最善の働きの中であり、これは至高の能力である intellectus[^{ウーシアー}叡智]の働きであり、最善の^{ウーシアー}叡智的存在を考慮している。」(Opera omnia. Vol.4. Pagina 507 左)【Sicut philosophus dicit in x ethicorum, ultima felicitas hominis consistit in optima hominis operatione quae est supremae potentiae, scilicet intellectus, respectu optimi intelligibilis.】。他方エックハルト同様ギリシア正教会筋では新プラトーン学派の息吹を伝える上記『ディオニューシオス文書』が格別に尊重された結果、例えば東方ギリシア教父 Παλαμάς[^{ウーシアー}Palamas]は、1338年頃の三部作『聖なる静寂主義者達に関する弁護』(Grégoire Palamas: Défense des saints hésychastes. Jean Meyendorff 編. Spicilegium Sacrum Lovaniense. Fasc.31. 1959年・再版1973年)第1部・第3問・第20節(p.153)で、ディオニューシオスの『神名論』第7章・第1節(PG. Tom.3. Col.865C)から、「^{ヌース}叡智の本性^{ウーシアー}φύσιςを超越する[協和一致]の^{ウーシアー}ἕνωσις[^{ウーシアー}Union mystica]、これにより^{ヌース}叡智は、^{ヌース}叡智の諸^{ウーシアー}ἐπέκεινα[^{ウーシアー}彼方]へと結び付けられる。」【ἕνωσις ὑπεραίρουσα τὴν τοῦ νοῦ φύσιν, δι' ἧς συνάπτεται πρὸς τὰ ἐπέκεινα ἑαυτοῦ.】と引用し、更に第21節(p.155)で「魂の情感 πάθος 部分の^{ウーシアー}清浄[=純粹化^{ウーシアー}κάθαρσις] … 全てから^{ウーシアー}叡智を^{ウーシアー}χωρίς[^{ウーシアー}離在]してしまう」【καθαρότης τοῦ παθητικοῦ μέρους τῆς ψυχῆς, πάντων [...] χωρίσασα τὸν νοῦν】と述べ、^{ウーシアー}χωρίς[^{ウーシアー}離在]を^{ウーシアー}ἐπέκεινα[^{ウーシアー}彼方]と共に^{ウーシアー}叡智を超える方向で理解してゆく。これに対し、「神」を

「Intellectus (叡智) 的(認識) 能力の創出者」(auctor intellectivae virtutis) とか「第一の叡智」(primus intellectus) と規定する 13 世紀の『神学大全』第 1 部・第 12 問・第 2 項 („Summa theologica“ Prima Pars 1265-1268. Lateinisch/Deutsch von Dominikanern und Benediktinern Deutschlands und Österreichs. Bd.1-8. Graz. Styria 1934-1951. Bd.1. Quaestio 12. Articulus 2. S.210) は、アリストテレス風の叡智[・知性]に重心を置く。そして実は同旨を既に 10 世紀 al-Farabi が『العقل(叡智) في(に) رسالة(論文)』(Texte arabe intégral en partie inédit établi par Maurice Bouyges. Deuxième édition. Beyrouth. Dar El-Machreq Sarl 1983. 3 頁-36 頁) 終結部(巫語原典 35 頁 14-36 頁 3/ 羅訳 Alfarabius «De intellectu et intellecto»: 初版«Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen-âge» 4. 1929; 再版«Les Sources gréco-arabes de l'Augustinisme avicennisant, par Etienne Gilson» Paris. J. Vrin 1986. 115 頁-126 頁) で「可能態に在る叡智(بالقوة بالعقل)と現実態に在る叡智(بالفعل)と(وعقل مستفاد)と獲得叡智(والمعقل الفعال)と能動叡智(والمعقل الفعال)」(巫 12 頁 5: 羅 117 頁: Unus est intellectus in potentia, alius intellectus in effectu, alius intellectus adeptus, alius est intelligencia agens) を明示し、「その全諸原理の[始源]原理(مبدأ المبادئ كلها): principium omnium principiorum)、かつ[始源]原理(ومبدأ) [14|15] その全諸存在者の第一[始源・原理](أول الموجودات): principium primi[異本 primum] eorum que sunt)、そして当の(وهذا)これは(هو)叡智(العقل)即ちそれ(الذي)それを語っている(يذكره)アリストテレスが(ارسطو) [A 卷]で(في)【巫 35 頁/巫 36 頁】A [第 12] 卷(الحرف اللام) [で]、[即ち]『自然[学]の後の書 [=形而上学書]中の(من كتاب ما بعد الطبيعة) [A 第 12 卷]で(من كتاب ما بعد الطبيعة) [語っている] عقل 叡智 {intelligentia: 叡智} である】[hoc est intelligencia quam ponit Aristoteles in littera in libro de metaphisica.]と、更に「これが(هو)第一の叡智(العقل الأول)、かつ第一の存在者(الأول الموجود)、かつ一者(الواحد) [14|15] 第一の[一者] (الأول)、かつ第一の眞実(الأول والحق) [ille est intelligencia prima et primum quod est et verum primum et unum primum,] (羅 126 頁) と述べている。

他方エックハルトが彼の『説教 28』で焦点を当てたのは (Werke I. S.322)、Plátô, der grôze pfaffe (偉大な神学者プラトーン) 風 ιδέα (理念) の結晶が放つ lûterkeit (純粋性) の光輝であり、その目指す先は Intellectus (叡智) をも超えた daz eine (一者: τὸ ἓν)、即ち in im selben quellende (そのもの自体で湧き溢れる者) に他ならない。勿論「プラトーンとアリストテレスの協和・一致」が彼らスコラ哲学者の念頭にあることは確かであるから、彼らの力点の置き所の相違にばかり注目しないで、むしろ共通の地平を切り開くことも必要である。その一つが当面の ἐπέκεινα (彼方) と χωρίς (離在) の共鳴による「プラトーンとアリストテレスの協和・一致」である。逆に、ここの籠が外れると、後者は「Noologisten (叡智[・知性]論者達) の頭目」から「Empiristen (経験論者達) の頭目」に転ずる事と成り、「アリストテレスが、Empiristen (経験論者達) の頭目と、他方プラトーンが Noologisten (叡智[・知性]論者達) の頭目と看做され得る。」(Bd.3. S.551: 『純粋理性批判』再版 882 頁) と評される。確かにカントの言う様に、観察や実験や経験を重視する自然科学の元祖アリストテレスが、「Empiristen (経験論者達) の頭目と看做され得る」ことにも一理ある。ところが自然学(自然科学)の書物を読んで、トーマス達スコラ学者の目の付け所は別の所にあった。例えば『神学大全』第 1 部・第 118 問・第 2 項で彼は、アリストテレスの『[諸]動物生成[誕生]論 (Περὶ Ζῴων γενέσεως)』第 2 書・第 3 章、「残る[結論]は、唯叡智 νοῦς のみが θύραθεν (外から) 到来し、θεῖον (神的) なのは唯これのみ。【λείπεται δὲ τὸν νοῦν μόνον θύραθεν ἐπεισεῖναι καὶ θεῖον εἶναι μόνον】(736B27-28) に着目し、この「唯 intellectus (叡智 νοῦς) のみが deforis (外から θύραθεν)」を重視している。「明らかなのは他方、intellectus (叡智) の principium (原理) は人間の中において、materia (質料) を超越した原理である。… 故に哲学者[の中の哲学者アリストテレス]は言う。『残る[結論]は、唯 intellectus (叡智 νοῦς) のみが de foris (外から) 到来する。』【Manifestum

est autem quod principium intellectivum in homine est principium transcendens materiam; [...] Et ideo Philosophus dicit: „Relinquitur intellectum solum de foris advenire.“ (『Summa theologica』 Prima Pars. Bd.8. Quaestio 118. Articulus 2. S.300)

命題「唯intellectus (叡智) のみが deforis (外から)」(『[諸]動物生成論』2・3: 736B27-28: τὸν | νοῦν μόνον θύραθεν) は、上記「νοῦς χωριστός: 離在χωρίςの叡智νοῦς」の由来を良く物語っている。これを新プラトーン学派なら「一者から」と明言するが、アリストテレスはこれ以上述べない。一つの理由は彼が χωρίς (離在) の ἐπέκεινα (彼方) に疑念を抱いている故と考えられる。「… 即ち諸ιδέα理念へと眼指を向け τὸ ἐπραγζόμενον (造る者: 上記 δημιουργός造物主: 『Timaios』41A) は誰か? [実際その頭や心の中の叡智νοῦςの思惟の中に理念が在るのではないか?] 結果かくして同じものが、παράδειγμα (範例) かつ [991A/B] εἰκόν (似姿) となる。なお不可能と考えられるのは、真実在οὐσία (本[質・実]体) と、この真実在が (生じる) 所 (の事物) が χωρίς (離[れて]在[る]) と言う点で、かくして如何にして諸ιδέα理念が、諸事物の οὐσία真実在であり、かつまた χωρίς (離在) なのか?」【[...] παράδειγμα καὶ [991A/B] εἰκόν [...] ὥστε πῶς ἂν αἱ ιδέαι οὐσίαι τῶν πραγμάτων οὐσαι χωρίς εἶεν;】(『形而上学』第1書・第9章: 991A-B)。これは彼の初期の未熟な考え方であるとか、また上記ツルヒャーの様に、彼以上に経験論者であった弟子「Θεόφραστος (Theophrastos) の加筆」として、片付けることも出来よう。ところがal-Farabi達アラビア思想家同様エックハルトは、こうした反プラトーンの側面より、むしろιδέα理念(εἶδος形相)論者としてアリストテレスを取り入れている。「さあ [諸君] 注意してくれ、アリストテレスが当の人について何を語っているか。… その様には vernünftlich (叡智的) に、万物の [中に宿る根源・始原の] bild (像) と form (形) を区別して理解する。この事を彼は人に帰し、人が人であるのは、人が像と形を理解する故であるとした。それに依り、人は人である、との旨である。そして、これが die höchst beweisung (最高の解釈) であり、この解釈に依り彼は人を定義し得たのである。… vernünftig (叡智的) な人は、自己自身を vernünftlich (叡智的) に理解し、自己自身において [既成の外から与えられる] あらゆる素材と形から abegschaiden (離在) である。… (S.176/S.178) … さあ [諸君] 努めて注意してくれ、アリストテレスが『形而上学』と題した書物の中で、den abegschaidnen gaisten (離在の諸霊に) ついて語っている事を。… このluter (純粋) blossom (赤裸な) wesen (存在) をアリストテレスは、一つの was (何) と名付けている。」(『説教15』: Werke I. S.176/S.178)。

【Jinbun-kagaku-kenkyû 2009 : Geisteswissenschaftliche Studien der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzsch) im Jahre 2009. Band 15 herausgegeben von der geisteswissenschaftlichen Abteilung der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzsch): Études des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi en l'an 2009. Tome XV édité par la section des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi : Kôchi-daigaku. Jinbun-gakubu. Ningenbunka-gakka. Editio die I Julii anno MMVIII】